

うと次に取り組んだのが、金沢市史編さんの仕事である。私とその近代部会長を引き受け、同時に研究会の全員に専門委員の肩書きをつけてもらった。後、松村さんが東海大学に転出したこともあって、後任の奥田晴樹（現教育学部教授）さんにもメンバーとして協力を願った。

発足した1993年当時は、近代部会なのか地域史研究会なのかよく境界がはっきりしない活動で、しばらく勉強会を続けた。数年後近代資料編上巻をまとめる段になり、資料の調査と収集、整理、資料編の基本的枠組みづくり等の編さんの舵取りはもっぱら林さんの力を頼りとした。彼の五加村研究会での蓄積、他自治体史での経験が非常に大きな貢献をしたとってさしつかえない。

とくに林さんが強調したのは、「近代金沢という都市をどのような特徴として捉え、それを資料編のなかでどのように自己主張するのか」という点であった。かなりの時間、このテーマをめぐって議論を繰り返したが、実に充実した水準の高い内容であったと思いつている。その結果、資料編上巻は戦前期の政

治・行政、産業・経済を中心とするが、「金沢論」と「軍事」の2章を設けることになった。今年の3月無事発刊にこぎ着けたが、いまあらためて上巻の目次を開いてみて、林さんの自治体史への思いがこの2つの章を通じてとくに強く伝わってくるのである。

\* \* \*

大学内における雑用の山も峠を越し、これから林さんと本格的な共同研究を一層押しすすめようと考えていた矢先、彼は突然去って行ってしまった。その後ろ姿を見ていると、彼は石川県地域史研究に関しては駆け足のよ様な早いペースでわれわれにすべきことを提示して、その猛スピードを落とさないままに逝ってしまったような思いにとられる。この15年間ほどの地域史共同研究を簡単にふり返ってみたが、残された者が後の役割を果さなければならぬことはよく承知している。しかし、いまだに欠けた穴の大きさにたじろいでいる有様である。多分、それは私だけの感慨でもあるまいと思う。

（金沢大学経済学部教授）

---

## 林さんの現代社会批判と運動論

### 伍 賀 一 道

今年8月、林宥一さんの葬儀に参列するために初めて訪れた北海道・深川は広大な農地に囲まれたこじんまりした街でしたが、駅前には核兵器廃絶をもとめる看板が立っていましたし、田圃の中には、農産物の生産者価格の保障を求める農民組合のポスターが目につ

きました。林さんはこのような雰囲気をもっと活発であった頃、その空気を吸って成長したのでしょうか。社会的差別や不公正に対して特に敏感でした。次の文章にあるように、こうべを垂れて嵐がとおりすぎるのをひたすら待ち続ける態度を林さんは厳しく批判してい

ます。

「私は、この日本社会に生きる者の一人として、〈現代に欠けているもの〉の中で最も気になるのは、人々の運動或いは権利のための闘争ということです。これを〈眼前の現実を自らの力で動かそうとする意志、或いは、動かし得るのだという信条にもとづく行動〉と言い換えても結構です。もし自分が、現代日本社会で何が一番問題か、と問われたら、私は躊躇することなく、このエネルギーと力が社会内部で衰弱しつつあることだと断定したいと考えています。……（中略）…… 社会に光や希望があるかどうかの判断基準は、その社会が豊かであるか、貧困であるかにあるのではなく、その社会に生きる人々の闘いのエネルギーがどの程度見出されるか、ということにあると私は考えています。逆に言えば、このエネルギーや力が衰弱した社会は、一見どんなに豊かで快適にみえたとしても、必ず人間の社会として深刻な歪みをもたらされるということです」（『金沢大学教職員組合ニュース』1998年9月2日号）。

生活を手軽にする多くの家電製品に囲まれ、インターネットをとおして世界中の情報が瞬時に得られるようになった現代の日本で、この「深刻な歪み」はたとえば過労死や過労自殺の多発として現れています。今日の多くの職場ではたえず時間に追われ、競争にせき立てられ、同僚を思いやるゆとりを失っています。リストラの不安はこうした状況をさらに加速しています。林さんは次のようにも述べています。

「戦後日本において労働者の権利のための闘争や運動の力をうまく抑えこむことで造られた企業社会、そしてそのもとで達成された

経済成長、これがいかに未来のないものであったか。」（同前）

受動的な、命令されるままの人々からなる社会は「効率的」であるかのように見えますが、長期的に見た場合、それは深刻な歪みをはらみ、「社会それ自身の生命力を衰弱させてしまう」（同前）と林さんは喝破しています。競争とかノルマや成果によって追い立てられるようなもとでは、人々とともに、人々からなる社会が衰退することを彼は危惧していました。

〈効率的であること、短時間で多くの成果が得られることはいいことだ〉という命題が企業社会は言うまでもなく、今や大学をもおおいつくそうとしています。林さんはこのような効率至上主義がはらんでいる暴力的な側面を厳しく批判していました。

「仕事の遅いもんだって、覚えが悪いもんだっている。人間だからしょうがねえ。どんなやつらでも、働けるようでないと、誰だって定年まで働けない。……年寄りや病弱者を職場から追い出したりするのは人間のやることじゃないんだ。」（笹山久三『郵便屋』河出書房新社）

林さんはこの一節をたいそう気にいって生協書籍部の書評誌の中でも、また、「組合ニュース」でも紹介していました。社会とは人がつくり、人のためにある。人を押し殺すような「社会」は本来の社会でないし、そのような「社会」は社会としての生命力を窒息させ、やがて衰退に向かうだろう。これを防ぐためにはその社会に生きる人々の闘いとエネルギーなしにはありえない。——歴史家としての林さんがたどりついた結論はこのことだったと思います。彼はこのような考えに

たって「労働者の権利のための闘争や運動」をことのほか大切にしていました。

林さんにとって、このような考えは大学にもあてはまるものでした。

「いま、21世紀に向けた大胆な改革案が準備されています。そこでは、深刻な大学教育の現状が指摘されています。しかし、問題なのは、改革の邪魔になるか、あるいはこれに抵抗する運動、その基盤になるような組織の力を弱めようとする意図がここに見られるということです。そのこと自体が改革の柱にさえされようとしています。本末転倒というべき発想です。……（中略）…… 大学という社会にとって労働組合は絶対になくてはならない存在だというのは、『うるさいやつら』の集団としての組合が（当局者にとっては目障りな存在かもしれませんが）、大学に生命力をもたらす最も主要な結合体であると考えからです。」（前掲『教職員組合ニュース』）

林さんはこの信念を体現して私たちに見せてくれました。金沢大学教職員組合の委員長  
の任期を見事にやりおえたのは亡くなる1週間前のことでした。

最後に一言。林さんと同年齢の私には共通する思いが少なくありません。たとえば、彼の次のような発言です。

「日本がまだ貧しかった時代——貧しかったが、『しあわせはオイラの願い、仕事はとっても苦しいが、流れる汗に未来をこめて……』という歌声が聞こえ、働く人々の姿はもっとよく見えていた。それが、いま、見えなくなっている——『市民の快適』とか、『生活者の立場』とか『消費者第一』という言葉にさえぎられて」（『アカンサス Review』 1997年6月号）。

こうした風潮にいつのまにか自分たちも安住してきたのではないか。その結果、親として、教師としてあまりにも無批判な若者を生み出したのではないか。これらについて林さんと議論することは不可能になりました。けれども彼が大切にしていた思い——「社会の生命力」、「大学の生命力」を維持しつづける努力を、後に残された私たちは忘れてはならないと思います。

（金沢大学経済学部教授）

---

## 林宥一先生と「金沢大学平和問題ネットワーク」

畑 安 次

「金沢大学平和問題ネットワーク」は、湾岸戦争を契機として国会における「PKO法」案の審議が始まったころ、理学部の奥野良之助先生とその呼びかけに応じた林宥一先生を中心に結成された学内教官・学生有志の組織である。その林先生の急逝からもう3ヶ月が

過ぎた。先生がネットワークにおいて果たされた役割はあまりにも大きい。「ネットワーク・ニュース」や本誌に掲載された先生のいくつかの文章を読みなおすことによって、ネットワークの今後の活動の視点を探してみたい。